

## 討論と結果：言語系統と文化

著者	崎山 理
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	272-280
発行年	1990-03-10
その他のタイトル	Discussions and Conclusion : Linguistic Considerations and Cultural Complexes
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003659">http://doi.org/10.15021/00003659</a>

## Ⅱ. 言語系統と文化

崎 山 理\*

- |                  |           |
|------------------|-----------|
| 1. はじめに          | 4. O類への所見 |
| 2. A類・O類の言語系統の意味 | 5. おわりに   |
| 3. A類への所見        |           |

### 1. はじめに

以下の分析と記述は、中間報告をふまえて新たに検討、作成された「343要素・237民族」樹状図にもとづいておこなった。

本稿は「言語」についての分析ではあるが、引用した民族名を、その民族の言語（民族語）とよみかえて作業している。（ただし、地名でとられている名称、たとえば Alorese は、それがインドネシア語派であることを文献で確認した。）

民族名を列挙するばあい、樹状図の上から下という順序をとった。

樹状図の最先端において枝別れした民族同士を末端群、順次、上位にあがるにしたがって「前」末端群、「前前」末端群、「前前前」末端群、と便宜的に呼ぶこととする。また記述を簡単にするため、/によって末端ないし前末端で組み合わせをなす民族を表わす。

言語系統は、とくにことわりのないかぎり、これも便宜上、[VOEGELIN and VOEGELIN 1977]によった。ただしこれに記載のないばあい、注記した参考文献に従った。

比較言語学の用語では、語族のなかの下位分類は語派、その下位分類は語群と呼び、また必要におうじて「亜」を付する。諸語というのは、やや曖昧な用語であるが、語派、語群の位置付けが明瞭でない諸言語に、あるいは地域的なまとまりをなしている諸言語にたいして用いる。

ダイエン (Dyen, I.) やワーム (Wurm, S.A.) の語彙統計学的分類による、比較

\* 国立民族学博物館第5研究部

言語学的ではない用語, phylum, stock, family, branch は, それぞれ「言語門」, 「言語系」, 「言語科」, 「言語群」また下位レベルにたいする sub- は「亜」と訳する。

また以下の記述は, 樹状図に掲げられたすべての民族について, その言語系統的関係を網羅的に検討したものではない。なお, 解説では, 言語の系統面からコメントすることに徹し, 民族学的解釈をあえて加えなかった。

## 2. A類・O類の言語系統的意义

2群に別れる巨大群は, 大林によって東南アジア巨大群, オセアニア巨大群と命名された。本報告では, 以下で, それぞれをA類, O類とよぶ。大ざっぱにいうと, A類には大陸部, O類には島嶼部の言語が含まれる。このわかれかたそれ自体は, なんら言語系統的なものではない。

しかし, A類にはチベット=ビルマ語派, カム=タイ語派, ミャオ=ヤオ語派, モン=クメール語派, ヴェトナムオン語派のような大陸系の語族のほか, オーストロネシア語族のうちのインドネシア語派(ヘスペロネシア語派といわれることもあるが, 以下に引用するダイエンのヘスペロネシアの概念とは同じでない)ので, 混同をさけるため, 本報告ではヘスペロネシアという概念をダイエンに限定して用いる)が含まれ, O類にはオーストロネシア語族のメラネシア語派, ポリネシア語派(あわせてオセアニア諸語)のほか, パプア諸語, オーストラリア諸語, 孤立語の Andamanese が含まれる, という顕著な傾向が認められる。

## 3. A類への所見

### 1) インドネシア語派および関連する諸問題

O類の Chamorro, Moken, Penan, Kubu, Aru, Babar, Wemale, Melanau, Yami, Enggano, Palau, Mentawai はインドネシア語派, Senoi, Semang, Nicobarese はモン=クメール語派に属する言語である。これらの語派がA類でなくO類に見出される理由として, いくつかの原因が考えられる。

まずこれらの言語がかなり古い層に属する(歴史的により早期に分岐したということの意味する)ということ, そして各語派の周縁部で使用されるということ, また周縁部において接する別系統の言語との混合現象が認められる, という点が指摘できそうである。

i) **Chamorro, Palau** はミクロネシアにおける唯一のインドネシア語派系言語に属する。ダイエンによる分類では、その位置がオーストロネシア大言語門マライ=ポリネシア言語科のなかのヘオネシア亜言語科（ほぼオセアニア諸語に相当）、ヘスペロネシア亜言語科（台湾諸語とつぎのモルッカ諸語を除くインドネシア語派に相当）、モルッカ亜言語科と、**Chamorro, Palau** がそれぞれ個別に、対等の位置にたつ点が注目される。

**Chamorro, Palau** にはインドネシア語派の他の言語にはみられないような、基層語からのいちじるしい影響が認められる [崎山 1989]。

ii) ダイエンは **Enggano** をオーストロネシア大言語門のなかで孤立的位置を与えられる10の地域的言語グループの一つ、インドネシアにおける孤立的言語とし、また **Mentawean** もその可能性があるとみなす。この地域（スマトラ島とその西側添いの島じま）の言語の孤立性によって、同じく孤立的な言語的特徴をもつ地域（台湾、ニューギニア・メラネシア）とともに、ダイエンは、それらをオーストロネシア民族の故里であると考え。ただし台湾の諸言語はA類に見出されるから、この特徴によって、O類にあるための絶対的条件とすることはできない。

**Enggano, Mentawean** のほか **Nias** も、スマトラ島西側にあつて、それぞれが孤立的言語グループを形成する [WURM and HATTORI 1981]。したがって、A類ではあるが末端群の **Nias/Minangkabau** とともに、末端群の **Yami/Enggano** も問題である。

iii) **Yami** は、台湾亜言語科ないしオーストロネシア大言語門のなかで孤立的位置を与えられる台湾の諸言語には通常、ふくめられず、フィリピン・オーストロネシア語族のなかのバシー諸語に含められる。

iv) **Moken** は、位置的にはビルマのメルゲイ諸島にあり最西端のマレー諸語の一言語として扱われる。しかしその言語的特徴として、オーストロアジア語族から語彙その他に強い影響が認められる。

このように、辺境におけるオーストロネシア語族では、**Moken** と同じ混合的特徴が **Acheh, Cham** にも認められる [COWAN 1948; LEWIS 1960]。

**Moken** は、主としてオーストラリア原住民諸語 (**Ungarinjin** から **Tiwi** まで) と前前末端群で別れるが、これは言語系統的には無意味な現象である。

またこのような言語的特徴からいうと、A類にあるとはいえ、末端群の **Redjang/Acheh** の **Acheh**、末端群の **Siamese/Khasi** と前末端群で組む **Cham** も問題を残す。

v) O類で末端群, 前末端群でグループをなす Aru, Babar, Wemale はヘスペロネシア亜言語科には含まれず, さきの Chamorro, Palau と同じくヘスペロネシア亜言語科から独立したモルッカ亜言語科に属する。これらの言語もインドネシア語派の周辺部に位置し, パプア諸語と向かい合っている。しかし Aru とは亜言語群レベルで近縁の Kei が A類で Lolo と末端群になるような問題がある。以上の言語は東寄りのモルッカ亜言語科である。いっぽう, A類では Alorese, Kedang, Sumbanese, Lio, Endeh, Manggarai という西よりのモルッカ亜言語科が, 集中的にまとまっている。

vi) O類において Penan, Kubu は, マレー半島の古層民である モン=クメール語派の一派 Senoi/Semang と Penan は前前末端群, Kubu は前末端群でグループを形成する。しかし Penan, Kubu は, 前者はカリマンタン島で Melanau などとレジャン=パラム諸語を形成し, 後者はスマトラ島でマレー語の一方言となる [WURM and HATTORI 1981] など, インドネシア語派的にとくに特異な点はない。しかるに, 前前前末端群で Yami から Mentawean までの言語とグループを作る Melanau は, Penan との距離が非常に遠い点が問題となる。

vii) O類に見出される Senoi, Semang, Nicobarese は, 普通, モン=クメール語派の一派として分類されるものの, オーストロアジア語族のなかでは, 前2者はアスリアン言語系, Nicobarese はニコバル言語系としてモン=クメール言語系からはむしろ独立的に取り扱われる [WURM and HATTORI 1981]。この場合も A類の古層とみなすべきであろうか。

## 2) オーストロアジア語族および関連する諸問題

O類の Senoi, Semang, Nicobarese 以外に, A類のオーストロアジア語族には, あまり分布上の個性がみられない。しいていえば, 前前前前末端群のレベルでとった Alorese から Katu までのグループのなかで, 11言語のうちの4言語 (Mnong Gar, Bahnar, Lamet, Katu) がモン=クメール語派である。しかも Alorese から Katu までのインドネシア語派は, 小スンダ列島に限定されている点を注意すべきであろう。しかし A類の Cambodian は, Mon/Burmese と組み, また Vietnamese がこれら3言語と組むなど, これら諸言語のグルーピングには, 言語系統以外の要素が強くはたらいっている。

## 3) インドネシア語派ジャワ語群および関連する諸問題

語彙統計学的分類では, ジャワ島, マドゥラ島, バリ島, ロンボック島を中心とした言語間の相関関係は, ヘスペロネシア亜言語科西インドネシア諸語のなかのジャワ

=スマトラ語群 (Javanese, Sundanese, Madurese, Malay などのほか, Aceh も含めるのはすでにのべたように問題である, 3-1-iv 参照), バリ語群 (Balinese), ササック語群 (Sasak) にわかれる。しかしA類における分布では, Javanese, Balinese が末端群で組み, これと Sasak が前末端群で組むのはまだ説得力をもつ。それにもかかわらず, この3言語がさらに Tagalog と前前末端群で組むのは問題である。しかしこのグループから, 末端群の Tausug(!)/Sundanese, そしてこの2言語と前末端群で組む Madurese のグループには遠すぎるであろう。Madurese はむしろ Malay に近く, また Tausug/Sundanese/Madurese と前前末端群で組む Tenggerese は, Javanese の方言としてむしろ Javanese と近くならなければならない。

4) A類の不整合・整合な末端群の組み合わせ

i) A類の末端群において, 言語系統的に問題となる組み合わせは次のとおり。地域的距離的に問題となるもののほか, 系統的下位分類的に異なるものもある。( ) に言語系統を示す。無印はインドネシア語派, TB はチベット=ビルマ語派, KT はカム=タイ語派, MY はミャオ=ヤオ語派, MK はモン=クメール語派, VM はヴェトナムオン語派, WP はパプア諸語西パプア言語門を表わす。

Atayal/Kalinga, Nias/Minangkabau, Eastern Toradja/Lakher (TB), Thado-Kuki (TB)/Dafla (TB), Banggai/Kelabit, Ifugao/Southern Toradja, Dusun/Karen (TB), Kayan/Nya Hon (MK), Li (KT)/Angami Naga (TB), Wa (MK)/Kachin (TB), Kedang/Mnong Gar (MK), Orang-Abung/Bahnar (MK), Manggarai/Katu (MK), Khmu (MK)/Tai (KT), Palaung (MK)/Shan (KT), Muong (VM)/White Tai (KT)/Black Tai (KT), Toba Batak/Achang (TB), (TB), Vietnamese (VM)/Cambodian (MK)/Mon (MK)/Burmese (TB), Jarai/Nashi (TB), Negri Sembilan Malay/湖南 Miao (MY), Pulang (MK)/Nu (TB)/Lisu, Puyi (KT)/貴州 Miao (YM), Tai Yuan (KT)/Tagalog, Kei/Lolo (TB), Madurese/Tausug/Sundanese, Redjang/Acheh, Ivatan/Galela (WP), Cham/Siamese (KT)/Khasi (MK) などが認められる。

ii) 以上のような不整合な組み合わせがあるにもかかわらず, 次は地域的にのみならず, 言語グループとして系統的なまとまりを示す例である。

上から, 台湾の諸言語として Puyuma から Paiwan までの8語 (Kalinga は例外), フィリピンの諸言語として Bagobo から Tagbanua までの4言語と Tinggian から Ifugao までの5言語 (Southern Toradja は例外, ただしこのグループと前のグループとの距離はかなり遠い), カリマンタンの諸言語として Dusun から

Kayan までの 4 言語 (Karen, Nya Hon は例外), ビルマのナガ=クキ=チン諸語として Rengma Naga から Chin までの 7 言語 (Apa Tani は例外), 小スンダ列島の諸言語として Alorese から Manggarai までの 6 言語 (Mnong Gar, Orang-Abung, Bahnar, Lamet, Katu は例外), ミャオ=ヤオ諸語として Laos Thai Yao から四川 Miao までの 6 言語 (Pai, Puyi, Kucong は例外), マダガスカル諸言語として Tsimihety から Tanala までの 6 言語, など。

またまとまりを 3 言語までとると, その数はさらに増える。

#### 4. O 類への所見

以上に述べた諸言語を除いて, O 類の言語は, 広義のオセアニアという概念にすべて含まれる。また諸言語の分布の仕方にも, ことに樹状図の上位において地域的な整合性がみられる。

##### (1) ミクロネシア諸語の相互関係

ミクロネシア地域の諸言語として Yapese から Ulithi までがグループをなし, ことに Truk から Ulithi まではトラック諸語を構成する。これらのトラック諸語と分岐する Yapese は, オーストロネシア大言語門のなかで孤立的位置を与えられていることから, 別格になる理由が存在する。しかし Yapese と同じく, 孤立的位置となる Nauru が Majuro と末端群を組む。ダイエンは, トラック諸語, Majuro, Ponape をへオネシア亜言語科カロリン言語群に含めるが, むしろ Nauru, Majuro, Ponape, Gilbert にトラック諸語と対立した孤立的位置を与える分類 [BENDER 1971] が妥当性をもつ。それにもかかわらず, Ponape は Southern Cook と末端群をなし, Gilbert は Tuamotu と末端群をなす点が問題である。

##### (2) ポリネシア語派の相互関係

続く二つのグループ (Anuta から Gilbert までのグループと Tongareva から Ponape までのグループ) のなかに, Tonga, Ontong-Java, Uvea を除くポリネシア語派の言語が完全におさまる。

ダイエンによるへオネシア亜言語科ポリネシア言語群は, 東部, 西部, Maori, Nukuoro, Kapingamarangi の 5 群にわけられるが, 東部とは, Hawaii から Tuamotu, Tongareva, Rakahanga, Mangareva, Austral, Marquesas, Society, Easter, Southern Cook まで, 西部とは, Anuta から Niue, Futuna, Samoa, Tikopia, Tokelau, Rennell までのように, ほぼ 2 グループに別れた状態で, 一致

を示す。しかし後のグループの Pukapuka, Ellice は、ダイエンの東部にははいらず、Maori はダイエンでは独立扱いされる点が異なる。また西部に含められるべき Tonga は、大きくはずれて Viti Levu と末端群で組むという問題もある。同じく西部に含められるべき Ontong-Java, Uvea が、それぞれ、大きくはずれて Nicobarese, Andamanese と末端群を作っているのも問題である。

Kapingamarangi は、前前末端群で Hawaii, Tuamotu, Gilbert と結ばれているが、外郭ポリネシア語の、Hawaii とのこのようなストレートな分岐は意味をなさない。原ポリネシア語の位置としては、西部ポリネシア地域が比定されるからである [PAWLEY and GREEN 1973]。

Rennell は Santa Cruz と末端群をなすが、Santa Cruz は、東パプア言語門リーフ諸島=サンタクルス亜言語門レベル言語科に属するから [WURM 1982]、この組み合わせも問題である。

### (3) パプア諸語の相互関係

さらに続く Seltaman から Yimar までの群（前群）と、Lau (Malaita) から Tonga, Baining から Rossel Islanders, Sulka から Lesu までの三つの小群（中群）をとび越えて、Kimam から Chamorro までの群（後群）にパプア諸語が集中する。とくに前群は、パプア諸語で占められる。

しかし末端群の個々の組み合わせには、ワームの語彙統計学的分類と、一致しない例も多い。

前群では、Seltaman, Faiwolmin, Baktaman がすべてトランスニューギニア言語門中央=南部ニューギニア言語系オク言語科に属する点はいよとして、Nimo は孤立的な小言語門の一つ、アライ（レフトメイ）言語門レベル言語科に、Iwam はセピック=ラム言語門セピック 亜言語門セピック 河上流言語系に属する。そしてむしろ Iwam に近いはずの、セピック=ラム言語門セピック 亜言語門セピック 河中流言語系 Kwoma, Abelam, Iatmul の3語はまとまってはいるが、Iwam からは大きくはずれて後群に見出される。

前群で一致するのは、トランスニューギニア言語門トランスフライ=イェルメック=マクレウ亜言語門レベル超言語系にすべて属する Gidra, Keraki, Kiwai, トランスニューギニア言語門中央=南部ニューギニア言語系アスマット・カモロ言語科に属する Mimika, Asmat である。

前群で一致しないのは、トトリチェリ言語門マリンベルグ言語系レベル言語科の Buna とトランスニューギニア言語門エレマ亜言語門レベル言語系の Purari, トラン



スニューギニア言語門ビナンデレ言語系の Orokaiva とトランスニューギニア言語門フィニスタール=フオン言語系の Watut である。

後群では、Siane, Enga がともにトランスニューギニア言語門東部ニューギニア高地言語系を構成するが、トランスニューギニア言語門ダニ=ケルバ言語系と前末端群で組むという問題点がある。

中群の Baining, Sulka はともに東パプア言語門ニューブリテン言語系を構成するが、たがいに近縁であるにもかかわらず、グループ同士が離れているほか、それぞれ、メラネシア語派の Owa Raha/Ulawa, Lakalai と末端群をなす。

後群でも、トランスニューギニア言語門コロポム亜言語門レベル言語科の Kimam (Kimaghama), トランスニューギニア言語門ウィッセル湖群ケマンドガ言語系 Kapauku は、それぞれ、メラネシア語派の Malekula/Tolai, Kwaio/Baegu/Lau (Malaita) と末端群になる。

また上記の前群、中群、後群からははずれて単発的に、トランスニューギニア言語門北部亜言語門レベル超言語系の Tor, トランスニューギニア言語門センタニ言語系の Sentani が、それぞれ、メラネシア語派の Dobu/Motu, Waropen と末端群を作る。

#### (4) メラネシア語派の相互関係

パプア諸語の説明で用いた「中群」以下に、メラネシア語派の言語が出現するが、そのあいだには、他の諸言語を混入させ、分布上は一様性をみせない。また地域的にも、末端群ないし前末端群で Lau (Fiji)/Pentecost, New Caledonia/Kaoka (Guadalcanal)/Trobriand/Rossel Islanders, Wogeo/Lesu, Malekula/Tolai, Banks/Kilenge, Dobu/Motu のように、まとまらない例が多い。このような分布は、メラネシア語派の言語的多様性とも関連するであろう。

#### (5) オーストラリア諸語の相互関係

オーストラリアの諸言語は、Ungarinjin から Tiwi まで6言語がまとまったグループを形成するが、Mabuiag はそれからはずれ、トランスニューギニア言語門トランスフライ=イェルメック=マクレウ亜言語門レベル超言語系への帰属が推定される Miriam と末端群を形成する。これは、両者のあいだに、言語連合 (linguistic links) が存在する可能性が示唆されている [WURM 1982] こととも関係があるろう。

## 5. お わ り に

(1) 2巨大群から出発して、各群には、言語系統的関連性が大筋では認められること、

(2) それにもかかわらず、文化要素のなかで言語系統は、歴史性がかなりよく維持されること（たとえば、A類の Vietnamese/Cambodian/Mon/Burmese, Cham/Siamese/Khasi などの末端群には、三つの異なる言語系統が見出される）、

(3) 言語的に古層をなすもの、混合的特徴を示すものは、分布上でいちじるしく散らばる傾向があること（たとえば、A類のオーストロアジア語族、O類のパプア諸語、メラネシア語派）、

(4) 入力されたデータの質によって、グルーピングにばらつきが現われること（O群の最下部 Ontong-Java から Nauru までがもっとも系統だっていない）、などの点が分析結果としてあきらかになった。